

# 千丈寺山の炭焼き窯跡探訪

## —三田市千丈寺山の人と暮らしの痕跡—

山崎 敏昭（ひとはく地域研究員）

### 1. はじめに

千丈寺（せんじょうじ）山（標高 589.6m）は、兵庫県立人と自然の博物館（ひとはく）の所在する三田市域のほぼ中央部に立地する、市域中北部の山地の山々の一峰である。山の南麓には青野ダム建設によって形成された人工湖である、千丈寺湖の湖水が広がる。

山の姿は、南側から望むと三角形であるが、東西からは標高 589.6m の南千丈寺山と標高 576.2m の北千丈寺山の二つの峯が、ちょうどフタコブラクダの背のように見える。当山はその名が示すようにかつては、山林寺院が造営された修行・信仰の場であり、江戸時代の地誌には千の山ひだのある深い山とされ、六甲山地より天狗が飛来するという伝説の山であった。干ばつの際には、周辺集落から山頂に柴を持ち寄り祈祷して焼き上げる雨乞い行事、「千束柴」が行われたという伝承も残る。

山は広野地区の上青野、下青野、小野地区の小野、乙原（おちばら）の各農村に属しており、それぞれの集落の里山として、狩猟の場、林業や山の恵みを楽しむ場、あるいは社や祠、堂のある信仰の場、祖霊が還る葬送の場として、人々の暮らしとともにある。山の東側では、近年、三田市の里山整備事業によって、「乙原てんぐの森」として、憩いの場が形成されている。この「てんぐの森」散策路周辺には、かつて行われていた炭焼きに伴う窯跡が残され、観察することができる。

炭焼きは阪神地区では現在も産業として続いている、川西市域北部が著名である。この地域の炭は、「菊炭」の名称で、湯茶に欠かせないブランド品となっている。一方、当年 50 代の筆者の記憶では、小学生の頃までは地域の裏山でも炭焼きをする姿を普通に見かけていたし、実家に「炭俵」なる小枝を編んだ炭の容器があったことを覚えている。おそらく、ブランド品としては成立していないが、石油・石炭や電気にその座を奪われるまで、それぞれの地域で自給される燃料として生産、消費されていたものと考えられる。

本稿では、千丈寺山の炭焼き窯の跡の一部について、現地調査を実施した事例をもとに、かつての里山で行われていた生業のようすを再構成する手掛かりを探ってみた。

### 2. 千丈寺山の炭焼き

千丈寺山の東麓に位置する乙原（おちばら）の集落は、1970 年代後半まで三田市域では「白炭」の主要な産地として知られていた。同じころには、青野ダム建設に伴う水没地域と周辺地域の衣食住や祭礼、生業などを記録する民俗調査が実施され、乙原の炭焼きの再現が記録されている（兵庫県教委 1979.03『青野川・黒川水系—民俗調査報告書—』）。この報告書では、炭焼きについて、「仕事の時期」、「焼き子と親方」（組織）、「窯の構築」、「（炭の）製造工程」、「俵



写真1：千丈寺山の位置（案内版に加筆）



写真2 「てんぐの森」散策道脇の炭焼き窯跡



写真3：千丈寺山の炭焼き窯跡の例：左上/炭焼き窯とテラス（上青野群）、右上/同平面形（上が焚口）  
 左下/掻きだし口を石囲みする窯跡（大平群）、右下/右側のみに囲いをする例窯跡（てんぐの森A群）

づめ・販売」、「服装・食事」、「木炭焼きに伴う伝承」といった構成で記録し紹介している。

ただ、記録には窯の立地や分布状況については、言及がなされていない。そこで、炭焼き窯の跡について、立地や分布状況を中心に若干の分析を試みた。

千丈寺山の炭焼き窯跡は、「てんぐの森」の登山道だけでなく、周辺の谷にも数多く存在することが判っている。同山は自宅に近いこともあり、2008年ころから断続的に踏査を行い、城跡や山林寺院の跡、古墳とともに、現在、15か所の谷で炭焼き窯跡50基あまりを確認している。

なお、炭焼き窯跡については、未だ千丈寺山のすべての谷を踏査しきれていないため、総数は数百基以上にのぼることが予想される。

### 3. 千丈寺山の炭焼き窯の分布のようす

千丈寺山の炭焼き窯の分布状況からみる特徴は、谷に近い裾部の一群と、谷の奥の最高所に近い一群に分かれている。このことは原料の木を求めて谷口から奥へと構築しつつ分布が広がっていったのではなく、一つの谷における材料の量に合わせて、作業単位が設定されていた可能性を窺わせる。

また、溪流に近い位置に点々と分布するが、水流に接する場には構築されていない。しかしながら、まったく水気のない場所には構築されていない。この点については、窯の天井（「ネリバチ」と呼ぶ）を構築する際の、土練り用の水を容易に確保する可能な場所を選んだ結果であることが窺える<sup>1)</sup>。

### 4. 千丈寺山の炭焼き窯のあり方

千丈寺山の炭焼き窯跡は、単独では構築されていない。必ず平地となるテラスが造成され、その平坦地の左右どちらか寄りに窯跡は位置する。テラスの窯跡のない部分には灰・炭が積もっており、灰化してしまった材や粉炭になってしまった材の掻き出し場であるとともに、窯出した木炭に灰をかぶせ消火と白化をさせる作業場であったことが窺える。



写真4：千丈寺山の窯跡の細部：左上/窯の焚口（上青野群）、右上/一部残った天井と窯内部（大平群）、  
左下/窯の煙出し（煙道口）（てんぐの森A群）、テラス（平坦地）の木灰・木炭がら（てんぐの森A群）

そうした灰の積もるテラスに隣接して、さらにテラスが設けられる例もあり、錆びて腐朽した缶類やガラス瓶などの破片が確認される場合もある。こうした平場は、材料の置き場、荷造り場、または、窯の火を見守る宿泊用の、簡易の小屋かけ場の跡であったと推定される。

次に窯跡本体について、平面形、構造、寸法などを報告する。

**平面形**：炭焼き窯の平面形は、焚口に向かって狭まる逆さの卵型（倒卵型）あるいは、無花果の実型をしている。これは、角形であると焚口から死角が出来、掻き出しの際に焼き上がった木炭の取り残しが生じるため、このような平面になったという。

**構造**：周囲に石を積み上げて構築している。正面の焚口は石積が露出しているが、それ以外の窯の内部は泥土で塗りこめられている。天井部（ネリバチ）は、部分的に残っている例では、厚さ10cm前後の練り土で構築され、天井の中央部が高くなる、亀の甲のようなドーム状（穹窿状）となる。

窯の奥の壁には煙出しが設けられている。煙出しの多くは内面にタール状の樹脂がこびりついていく状況が観察できる。筆者の実家のある三木市周辺では、奥壁の他に左右の壁にも煙道を設け3穴とする例が見られたが、千丈寺山の事例は、ほぼすべてが奥壁のみに煙道を設ける一穴の型式である。

**寸法**：多くの窯は、灰絶後に天井などが崩落し埋没している例が多く、窯がくぼみとして認識される程度のももある。平面規模の寸法概略は、長軸1.2～1.5m前後、短軸0.7～1.2m前後、深さ（あるいは高さ）は、残りの良いもので約1mであり、多くは0.5m程度のくぼみとなっている。窯の入り口（焚口）の幅は0.3m程度、高さは0.3～0.5mと狭いものとなっている。

##### 5. おわりに：炭焼き窯跡からかつての人と山の暮らしを再確認してみたい

炭焼き一木炭生産一は、昭和50年代までは、里山のある地域では一般的なものとして存在していた山の生業のひとつである。現在は、川西市一庫や黒川地域などのようにブランド炭として継承されて

いる例もあるが、ほとんどは、化石燃料利用などの「“エネルギー革命”により、家庭燃料としての需要がなくなり」<sup>2)</sup>、人知れず廃絶して行った。

このようななか、兵庫県でも 1970 年代から 1980 年代に、ダム建設に伴う水没地域の民俗調査、諸職関係民俗文化財調査として、各地の炭焼きの記録化が行われた。

また、近年では山中を貫く高速道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査で、古代の遺跡とともに発見され、記録保存された炭焼き窯跡の事例も見られる<sup>3)</sup>。

ただ、今回の踏査内容を検討するなかで、炭焼き窯跡の分布状況から営まれた経営単位があったことが窺える点、煙出しの数の違いで気付いた窯の構造にバリエーションがある可能性がある点が明らかとなった。これらの点からは、これまでに記録されず見過ごされてきた、「炭焼き（木炭製造）」の姿があるように考える。

自宅裏山の千丈寺山における炭焼き窯跡の踏査は、まだ始めたばかりである。この山の炭焼き窯跡の総数は、数百基、ひよっとすると千基にのぼることが予想される。

炭焼き窯跡の踏査をしている最中に周辺に目をやると、ほとんどの木が根元から二股、三ツ俣、それ以上の本数に分かれて伸びたクヌギやカシ、ナラ、ヤマザクラの林であることに気付く。それらは炭焼きの原木として、幾度も根元から伐採されたため、ヒコバエが元の切株の周りから生じ成長した痕と考えられる。幹の太さから「50 年くらいは経過しているのだろうか」と思いを馳せるとき、確かにそこにあった山の暮らしが目に浮かんで来るとともに、そうした人の活動が現在の林の姿を方向づけたことが窺える。



写真 : 窯跡周辺の林のようす (大平群)

1970 年代ころまで全国各地で行われていた炭生産の痕跡は、そこかしこに残っています。今回の筆者の研究発表をご覧になった皆さんが、炭焼き窯跡を里山や亜高山へと自然探訪や散策で訪れる際の、山歩きの魅力発見のひとつに加えていただければ幸いです。

炭焼き窯の跡からどんなかつての暮らしが再現できるのか、興味を持って今後も山歩きを続けて行きます。続報をご期待ください。

文献：川西市教委 1975.03 『国崎一庫ダム水没地区民俗資料緊急調査報告書一』

兵庫県教委 1979.03 『青野川・黒川水系一民俗調査報告書一』兵庫県民俗調査報告 8

兵庫県教委 1988.03 『兵庫県の諸職一兵庫県諸職関係民俗文化財調査一』兵庫県民俗調査報告 11

註：1) 乙原区脇田氏からの聞き取り。「水の無い所では窯築きの土練りが出来ない。(土練り用の) 大量の水を持って山に上がるのも適当でない。」

2) 兵庫県教委 1979.03、1988.03 の炭焼きの紹介より引用。

3) 兵庫県教委 1989.03 「第 5 章第 9 節 炭窯」『中尾城跡一近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XI一』兵庫県文化財調査報告書第 67 冊

兵庫県教委 1992.03 「中池ノ内窯跡群 5. 炭窯」『相野古窯跡群一近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書 XVIII一』兵庫県文化財調査報告書第 115 冊